広島大学附属福山中・高等学校
中等教育研究紀要　第37巻

乳幼児とのふれあい体験学習の成果

—非体験学習者との比較から—

小林　京子・高橋美与子

今日は、家族形態の多様化に伴い、核家族のうえ少子化の傾向が進み、合計特殊出生率は1.5以下で、子どもの数が急速に減少している。家族数や兄弟姉妹数が少ない高校生にとって、日常生活において乳幼児とふれあう機会や身近に親が乳幼児を育てているようすを見る機会は少ない。また、そのような機会があっても、核家族の中で保育に関する文化の伝承が少なく、精神的・肉体的支援の乏しい状況での保育の姿である場合が多い。

そこで、保育に関する学習において、乳幼児とのふれあい体験学習を取り入れ、乳幼児との交流を通して乳幼児の特徴を知り、接し方を身につけ、いたわりの気持ちや生命の大切さを育むことを目指した。本研究では、学習前後の調査から、ふれあい体験学習者と非体験学習者の保育および乳幼児に対する意識やイメージ・思いの変化に、体験学習の成果としての差異が見られたので報告する。

1．はじめに

今日は、家族形態の多様化とともに、高齢少子化が進み、合計特殊出生率は1993年に1.46（厚生省「人口動態統計」1995年）で、子どもの数が急速に減少している。さらに、核家族化のもとでは、保育に関する精神的・肉体的支援は少なく、文化の伝承も行われにくい。家族数や兄弟姉妹の少ない中で思春期を迎えた高校生にとって、幼い子どもたちとふれあう機会や身近に親が乳幼児を育てている姿を見る機会は少ない。従って、多感な思春期に乳幼児に対する関心や理解に欠如したままでは、将来、親としてあるいは大人として子どもの保育に携わるとき、極端な不安感が生じたり、命を大切にする気持ちやいたわりの気持ちに欠けたり、家族関係においても親子の絆が希薄化し易いのではないかと危惧の念を抱く。

そこで、昨年度（1995年度）に引き続き、日頃幼い子どもたちと接することの少ない、さらに幼い子どもたちへの接し方がわからなかったり関心の薄い高校生に、保育に関する学習の中で、乳幼児とのふれあい体験学習を取り入れ、乳幼児を抱っこしたり、いっしょに遊びながら乳幼児の特徴を知り、接し方を身につけ、いたわりの気持ちや生命の大切さを育むことを目指してみた。幸いにも、学校の近くに０～５歳児を保育している保育所があり、そこで保育されている乳幼児にとってもその多くが高校生のような兄・姉の少ない家庭環境であるため、互いの交流に所長・保母さんたちも喜んで応じて下さり、実施することができた。しかし、本年度（1996年度）も高校生５クラスのうち２クラスは授業時間割の関係上、保育所の午後睡眠の時間に該当し、ふれあい体験学習はできなかった。

本研究では、おもに本年度、保育に関する学習過程の中で乳幼児とのふれあい体験学習のできた３クラスと、体験学習ができなかった（教室内での保育に関する学習のみ）２クラスの生徒の学習前後の保育に関する意識や乳幼児に対するイメージ・思いの変化を中心に、調査をもとに比較し、具体的に体験学習の成果を明らかにしてみた。

2．アンケート調査

学習前後での保育に関する意識や乳幼児に対するイメージ・思いの変化等を知るためにアンケート調査をした。

(1) 調査対象および調査時期

a、調査対象 保育に関する学習をする本校の高校２年生

1995年度生　男子143名、女子89名　計232名

1996年度生　男子115名、女子87名　計202名

b、調査時期　学習前　1995年度生・1996年度生それぞれ1995年９月・1996年９月

学習後　1995年度生・1996年度生それぞれ1995年11月・1996年11月

(2) 調査内容

学習前には、生徒を取り巻く状況、保育に関する意識、乳幼児に対するイメージを把握するために、表１に示す質問紙を用いた。

表１　学習前のアンケート調査内容

乳幼児とのふれあい体験に向けて

1．あなたの周りに、小学校に入る前の乳幼児（1歳までが乳児、1歳～5歳が幼児）がいますか。
　a．家族の中に（ア、いる……〈　　〉歳　イ、いない）
　b．近所に　　（ア、いる……〈　　〉歳　イ、いない）
　c．親戚に　　（ア、いる……〈　　〉歳　イ、いない）

2．今までに乳幼児と一緒に遊んだことがありますか。
　a．一度もない　b．何度かある　c．度々ある　d．その他

3．今までに乳幼児の世話をしたことがありますか。
　a．一度もない　b．何度かある　c．度々ある　d．その他
　3―(1) 世話をしたことのある人、それはどんなことですか。
　　a．ミルクを飲ませたり、食事を食べさせたり　b．おむつの交換
　　c．着替えを手伝う　d．だっこ・おんぶをする
　　e．その他

4．乳幼児を育てることについてどのように思いますか。(自分の思うものを1つだけ選んで下さい)
　a．めんどうである　b．いそがしい　c．苦しい　d．おもしろい
　e．楽しい　f．すばらしい　g．幸せである　h．何とも思わない
　i．わからない　j．その他

5．乳幼児を育てている親をみて、どのように思いますか。(自分の思うものを1つだけ選んで下さい)
　a．大変そう　b．忙しそう　c．めんどうくさそう　d．きつそう
　e．楽しそう　f．偉いと思う　g．自分も育てられたなと思う
　h．幸せそう　i．生き生きしている　j．何とも思わない　k．わからない
　l．その他

6．「親がこどもを育てる」ということについて、どのように思いますか。
　(自分の思うものを1つだけ選んで下さい)
　a．親の責任で、当然すべきことだと思う　b．素晴しいことだと思う
　c．ありがたいことだと思う　d．わからない
　e．その他

7．乳幼児についてのイメージ・思いはどの程度ですか。当てはまると思うところに○印をつけて下さい。

	非常に	かなり	やや	とちらでもない	やや	かなり	非常に	
a．弱々しい								強くたくましい
b．静か								やかましい
c．何もできない								じっとしない
d．病弱								元気
e．純真								悪どい
f．かわいい								憎い
g．好きである								嫌いである

　h．その他

8．「赤ちゃん」から何を連想しますか。(自分の思うものを1つだけ選んで下さい)
　a．お乳　b．おむつ　c．弟　d．妹　e．天使　f．お父さん
　g．お母さん　h．小犬　i．小猿　j．小猫　k．その他

5年（　）組（　）番（　　）

学習後は、保育に関する意識や乳幼児に対するイメージ・思いの変化を知るために表２の質問紙で調査した。

表２　学習後のアンケート調査内容

乳幼児との交流体験をして

乳幼児に対する気持ちが変わりましたか

1．乳幼児を育てることについてどのように思いますか。(自分の思うものを1つだけ選んで下さい)

a．めんどうである　b．いそがしい　c．苦しい　d．おもしろい
e．楽しい　f．すばらしい　g．幸せである　h．何とも思わない
i．わからない　j．その他

2．「親がこどもを育てる」ということについて、どのように思いますか。
(自分の思うものを1つだけ選んで下さい)

a．親の責任で、当然すべきことだと思う　b．素晴しいことだと思う
c．ありがたいことだと思う　d．わからない
e．その他

3．乳幼児についてのイメージ・思いはどの程度ですか。当てはまると思うところに○印をつけて下さい。

	非常に	かなり	やや	とちらでもない	やや	かなり	非常に	
a．弱々しい								強くたくましい
b．静か								やかましい
c．何もできない								じっとしない
d．病弱								元気
e．純真								悪どい
f．かわいい								憎い
g．好きである								嫌いである
h．その他								

5年（　）組（　）番（　　）

3．保育に関する学習状況

(1) 学習計画

表３に保育に関する学習の指導計画を示す。

表３　指導計画

1) 乳幼児とのふれあい体験	4	③基本的生活習慣	(4)
2) 乳幼児の心身の発達と特徴	4	④乳幼児の食事	(4)
3) 乳幼児の生活と世話	10	4) 集団保育と家庭保育	1
①乳児の生活と世話	(1)	5) 子どもの人権と福祉	1
②乳幼児の世話（遊びを中心に）	(1)		

(2) ふれあい体験学習のできたクラスの学習

a．計画

学習の初期に第１回目を、第２回目は１回目の体験を通して得た乳幼児の日常生活、心身の発達の特徴の認識をもとに遊具・玩具を製作し、その遊具・玩具を持参して交流することを計画し、保育所との日程調整を図る。

b．実施時期

体験学習ができたクラスの実施時期は表４の通りである。

表４　実施時期

回＼組	E組	C組	A組
第1回目	9月11日（水）	9月13日（金）	9月20日（金）
第2回目	10月30日（水）	10月18日（金）	11月１日（金）

c．実施状況

① 第１回目の交流

写真1

とにかく、一緒に遊びながら乳幼児の日常生活はどんなものか、また、年齢による発達の特徴をつかむことを主眼とした。交流したい乳幼児のクラス（年齢によって分けられている－－0,1歳児＜１クラス＞、2歳児＜１クラス＞、3歳児＜２クラス＞、4歳児＜２クラス＞、5歳児＜１クラス＞－－）は予め生徒の希望を重視しながら、また、保育所の希望であった１クラスへの人数に極端な偏りがないことや男子あるいは女子のみということのないように配慮し、グループ分けをして決めておいた。いざ交流の場に臨むと、予想通り、一部の生徒の中には乳幼児とどのように関わればよいのか分からず棒立ちの状態の者が見受けられた。写真１は第１回目の交流のようすである。

② 遊具・玩具の製作

１回目の交流をもとに、乳幼児の発達年齢や特徴、乳幼児にとって望ましい遊具・玩具の条件も考え、さらに、乳幼児に楽しく遊んでもらいたいという気持ちを強く抱いて、グループや個人で製作に意欲的に取り組んでいた（写真２、３）。製作中のようすから、幼い子へのいたわり・思いやりが伺え、ほほえましい思いがした。と同時に、手作り遊具・玩具の良さを感じているようであった。こうした経験は、将来親となったとき、きっと役立つであろうし、親子のコミュニケーションの場にも生かしていって欲しいものと思う。

写真2

写真3

③ 第２回目の交流

１回目でなかなか交流の場に入り難かった者も、自分の作ったおもちゃに興味を示して楽しく遊んでくれている乳幼児の姿を見、照れながらも声を掛けることができていた（写真４、５）。乳幼児からお兄ちゃん、お姉ちゃんといって慕われ、一層幼い子に対してかわいらしく思い、いたわりの気持ちが高まっているようであった。中には、数人の幼児から手や足を引っ張られ、幼児が互いに独り占めにしようとするあまり、けんかになり泣き出したりする子がいて、どのようにしたらよいか戸惑っている生徒もいた。

写真4

写真5

(3) ふれあい体験学習ができないクラスの学習

乳幼児との直接交流は残念ながらできないが、保育の学習を通して、保育の学習のねらいの達成を図るために、間接的ではあるが乳幼児のようすを把握しやすいように視聴覚教材を活用した。例えば、保育には両性の果たす役割が大切であることを認識させるために、VTR「お父さんへ、赤ちゃんからのメッセージ」(NHKスペシャル'94.5.22放映) を、また、各発達年齢に応じての特徴や保育者としての心構え等を理解させるために、VTR「乳児の保育」(一橋ビデオシリーズ)、「3歳児」「5歳児」(NHK学校放送　新しい保育シリーズ)の視聴学習を行った。さらに、テープレコーダーで赤ちゃんの泣き声を聴かせ、要求によって泣き方に違いがあることや、保育人形を用いて、抱き方、衣服の着せ方、沐浴の仕方等の模擬体験にも努めた。また、マスコミに報じられている記事等の活用、紹介も取り入れ、身近に感じられるよう働きかけた。遊具・玩具も実物を提示し、乳幼児にとって配慮しなければならない事柄を考えまとめた上で、それらの製作に取り組ませた。製作した物は、他の体験学習をするクラスの人たちに持って行ってもらい、その反応を後で聞いたり、あるいは、クラスの代表者が保育所に直接持参したりした。

4．調査結果および考察

(1) 調査の回答状況

表5に学習前および学習後の回答者数と回答率を示す。

以降、1996年度生でふれあい体験学習をしたクラスをAグループ、体験学習をしないクラスをBグループとし、1995年度生は、前者をA'、後者をB'グループとして記すことにする。

表5　回答状況　　回答者数（回答率%）

クラス／性別（人数）／学習段階	1996年度生						1995年度生					
	Aグループ			Bグループ			A'グループ			B'グループ		
	男 (70)	女 (51)	計 (121)	男 (45)	女 (36)	計 (81)	男 (87)	女 (52)	計 (139)	男 (56)	女 (37)	計 (93)
学習前 (9月)	65 (92.9)	48 (94.1)	113 (93.4)	43 (95.6)	33 (91.7)	76 (93.8)	85 (97.7)	51 (98.1)	136 (97.8)	53 (94.6)	32 (86.5)	85 (91.4)
学習後 (11月)	67 (95.7)	44 (86.3)	111 (91.7)	44 (97.8)	32 (88.9)	76 (93.8)	84 (96.6)	52 (100)	136 (97.8)	54 (96.4)	35 (94.6)	89 (95.7)

(2) 生徒を取り巻く状況

表6－①～③には、高校生たちの身近における乳幼児の存在状況を表している。乳幼児は<①家族>にはほとんどおらず、<②近所>に約30%、<③親戚>に約40%強の者はいるが、日常生活ではほとんど関わりあいがない状況におかれているものと思われる。表7に示すように乳幼児と一緒に遊んだ経験が一度もない者が全体の約1/5近くに至り、また、表8に示すように、全体で約55%強の者は乳幼児の世話を一度も経験していない状況にある。男女別にみてみると、いずれも男子においてその割合が高い。さらに、世話をした経験のある者で、その世話の内容の多くは、表9に示すように「d．だっこ・おんぶをする」が最も多く(1996年度生は約90%、1995年度生は約75%)、次

いで1995年度生と順位は異なるが、「c．着替えの手伝い」、「a．ミルクを飲ませたり、食事を食べさせたりする」で、特に後者２つの内容（c、a）については女子の割合が高い。

こうした点は、保育の学習をしていく中で、男女共修の意義を強くアピールしていく必要性を痛感する。

表６―①　乳幼児の存在〈家族に〉　実数（%）

存在＼年度・性	1996年度生			1995年度生		
	男	女	計	男	女	計
いない	105(97.2)	76(93.8)	181(95.8)	138(100.0)	82(98.8)	220(99.5)
いる	2(1.9)	2(2.5)	4(2.1)	0(0)	1(1.2)	1(0.5)
無答	1(0.9)	3(3.7)	4(2.1)			

表６―②　乳幼児の存在〈近所に〉　実数（%）

存在＼年度・性	1996年度生			1995年度生		
	男	女	計	男	女	計
いない	82(75.9)	50(61.7)	132(69.8)	97(70.3)	51(61.4)	148(67.0)
いる	26(24.1)	25(30.9)	51(27.0)	41(29.7)	32(38.6)	73(33.0)
無答	0(0)	6(7.4)	6(3.2)			

表６―③　乳幼児の存在〈親戚に〉　実数（%）

存在＼年度・性	1996年度生			1995年度生		
	男	女	計	男	女	計
いない	61(56.5)	40(49.4)	101(53.4)	83(60.1)	49(59.0)	132(59.7)
いる	45(41.7)	38(46.9)	83(43.9)	55(39.9)	34(41.0)	89(40.3)
無答	2(1.9)	3(3.7)	5(2.6)			

表７　乳幼児と一緒に遊んだ経験　実数（%）

経験の度合い＼組別	1996年度生					1995年度生		
	Aグループ		Bグループ		全体			
	男	女	男	女		男	女	全体
a．一度もない	17(26.2)	3(6.3)	11(25.6)	3(9.1)	34(18.0)	38(27.5)	6(7.2)	44(19.9)
b．何度かある	38(58.5)	33(68.8)	24(55.8)	20(60.6)	115(60.8)	75(54.3)	57(68.7)	132(59.7)
c．度々ある	9(13.8)	11(22.9)	7(16.3)	9(27.3)	36(19.0)	22(15.9)	19(22.9)	41(18.6)
d．その他	1(1.5)	1(2.1)	1(2.3)	1(3.0)	4(2.1)	3(2.2)	1(1.2)	4(1.8)

表8　乳幼児を世話した経験　　実数（%）

組別 / 経験の度合い	1996年度生					1995年度生		
	Aグループ		Bグループ		全体			
	男	女	男	女		男	女	全体
a．一度もない	43(66.2)	19(39.6)	29(67.4)	16(48.5)	107(56.6)	83(60.2)	39(47.0)	122(55.2)
b．何度かある	17(26.2)	20(41.7)	12(27.9)	14(42.4)	63(33.3)	41(29.7)	35(42.2)	76(34.4)
c．度々ある	3(4.6)	8(16.7)	1(2.3)	3(9.1)	15(7.9)	10(7.2)	8(9.6)	18(8.1)
d．その他	2(3.1)	1(2.1)	1(2.3)	0(0)	4(2.1)	4(2.9)	1(1.2)	5(2.3)

表9　世話をした内容　　実数（%）

組別 / 内容	1996年度生					1995年度生		
	Aグループ		Bグループ		全体			
	男(20名)	女(28名)	男(13名)	女(17名)	(78名)	男(51名)	女(43名)	全体(94名)
a．ミルクを飲ませたり食事を食べさせたり	5(25.0)	12(42.9)	2(15.4)	7(41.2)	26(33.3)	12(23.5)	16(37.2)	28(29.8)
b．おむつの交換	3(15.0)	4(14.3)	1(7.7)	1(5.9)	9(11.5)	5(9.8)	5(11.6)	10(10.6)
c．着替えの手伝い	6(30.0)	11(39.3)	2(15.4)	9(52.9)	28(35.9)	8(15.7)	10(23.3)	18(19.1)
d．だっこ・おんぶをする	20(100)	27(96.4)	10(76.9)	14(82.4)	71(91.0)	37(72.5)	34(79.1)	71(75.5)
e．その他	2(10.0)	6(21.4)	2(15.4)	2(11.8)	12(15.4)	12(23.5)	12(27.9)	24(25.5)

（複数回答）

(3) 保育に関する意識

a．乳幼児を育てることについて

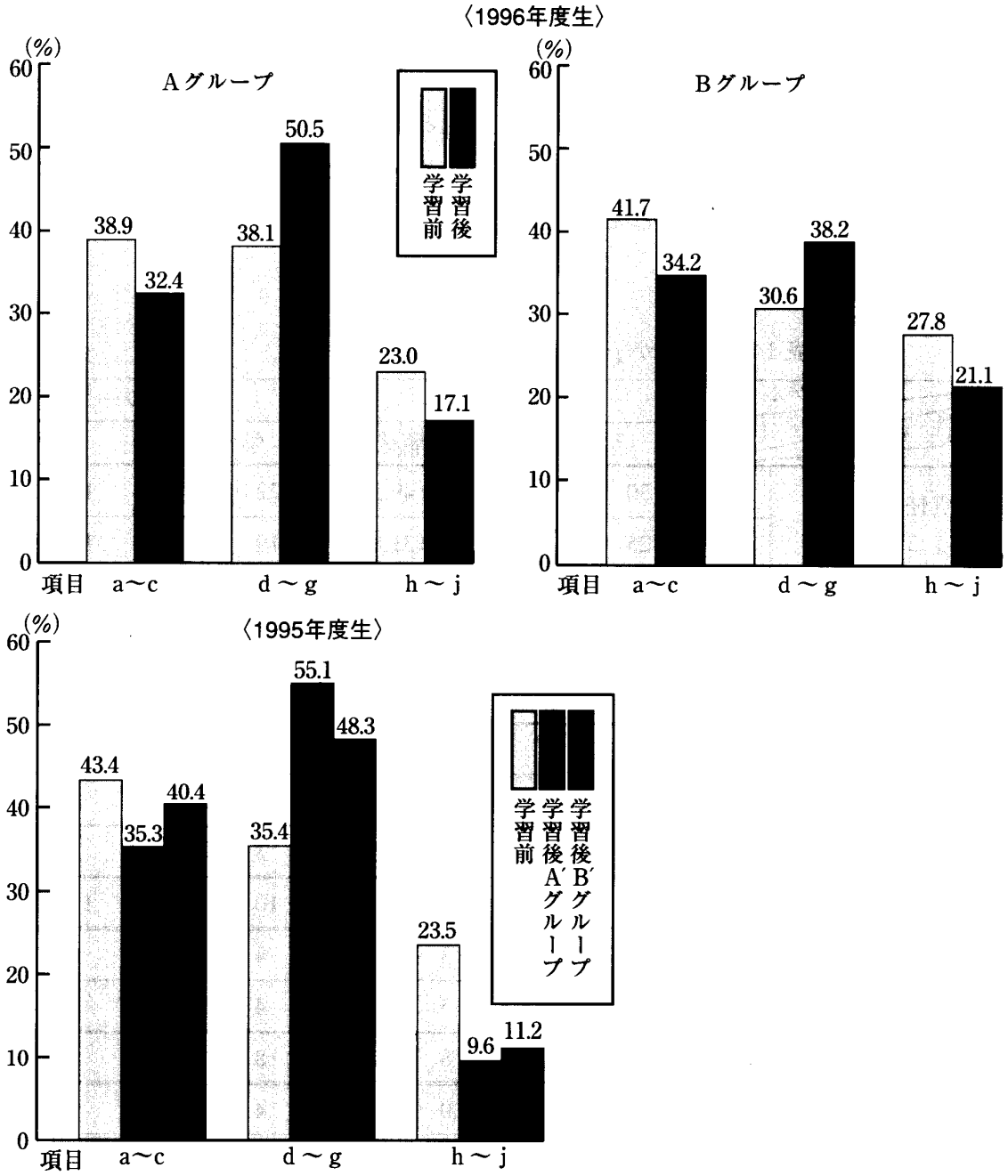
「乳幼児を育てることについてどう思いますか」という質問に対しての回答結果を表10と図1に示す。表10の項目a．めんどうである、b．いそがしい、c．苦しい　は消極的でやや重荷としての意識として、また、d．おもしろい、e．楽しい、f．すばらしい、g．幸せである　は意欲的あるいは前向きな姿勢として捉え、意識の概要としてまとめた結果が図1である。

A、Bグループ共に学習前では、項目a～cの割合が他項目に比べて高い。しかし、学習後においては、項目a～cの割合は減少し、項目d～gの割合が高くなっている。つまり、前向きな姿勢としての意識が高まっていることが伺える。1995年度生のA'グループと同様に、体験学習者の方の変化が大きい。また、項目h．何とも思わない、i．わからない、j．その他（無答）のように無関心あるいは不確かな意識についても、学習後には減少し、保育学習の効果が僅かながら伺える。しかも、変化の大きさは、1995年度生では大きく、体験学習による効果がみられる。しかし、1996年度生の場合、いずれのグループにせよ、約20%前後の者は無関心あるいは不確かな意識の者がいるので、こうした生徒への意識の高揚あるいは勇気づけが不十分であったことが心残りで、指導者として反省しなければならない点として受けとめ、今後の指導に配慮したい。

表１０　乳幼児を育てることについて　　実数（%）

項目	性別 ＼ グループ・学習段階	Aグループ 学習前	Aグループ 学習後	Bグループ 学習前	Bグループ 学習後
a．めんどうである	男	10 (15.4)	3 (4.5)	3 (7.0)	1 (2.3)
	女	4 (8.3)	2 (4.5)	3 (9.1)	3 (9.4)
	計	14 (12.4)	5 (4.5)	6 (7.9)	4 (5.3)
b．いそがしい	男	17 (26.2)	20 (29.9)	12 (27.9)	13 (29.5)
	女	10 (20.8)	6 (13.6)	11 (33.3)	9 (28.1)
	計	27 (23.9)	26 (23.4)	23 (30.3)	22 (28.9)
c．苦しい	男	3 (4.6)	5 (7.5)	1 (2.3)	0 (0)
	女	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	計	3 (2.7)	5 (4.5)	1 (1.3)	0 (0)
d．おもしろい	男	6 (9.2)	8 (11.9)	7 (16.3)	5 (11.4)
	女	11 (22.9)	7 (15.9)	1 (3.0)	2 (6.3)
	計	17 (15.0)	15 (13.5)	8 (10.5)	7 (9.2)
e．楽しい	男	8 (12.3)	10 (14.9)	3 (7.0)	6 (13.6)
	女	5 (10.4)	7 (15.9)	2 (6.1)	3 (9.4)
	計	13 (11.5)	17 (15.3)	5 (6.6)	9 (11.8)
f．すばらしい	男	3 (4.6)	7 (10.4)	1 (2.3)	7 (15.9)
	女	2 (4.2)	4 (9.1)	1 (3.0)	2 (6.3)
	計	5 (4.4)	11 (9.9)	2 (2.6)	9 (11.8)
g．幸せである	男	3 (4.6)	5 (7.5)	3 (7.0)	5 (11.4)
	女	5 (10.4)	8 (18.2)	4 (12.1)	4 (12.5)
	計	8 (7.1)	13 (11.7)	7 (9.2)	9 (11.8)
h．何とも思わない	男	3 (4.6)	1 (1.5)	0 (0)	0 (0)
	女	0 (0)	0 (0)	2 (6.1)	0 (0)
	計	3 (2.7)	1 (0.9)	2 (2.6)	0 (0)
i．わからない	男	10 (15.4)	6 (9.0)	6 (14.0)	7 (15.9)
	女	7 (14.6)	6 (13.6)	6 (18.2)	2 (6.3)
	計	17 (15.0)	12 (10.8)	12 (15.8)	9 (11.8)
j．その他	男	2 (3.1)	2 (3.0)	5 (11.6)	0 (0)
	女	4 (8.3)	4 (9.1)	1 (3.0)	7 (21.9)
	計	6 (5.3)	6 (5.4)	6 (7.9)	7 (9.2)

図１　乳幼児を育てることについて（意識の概要）



ｂ．親が子どもを育てることについて

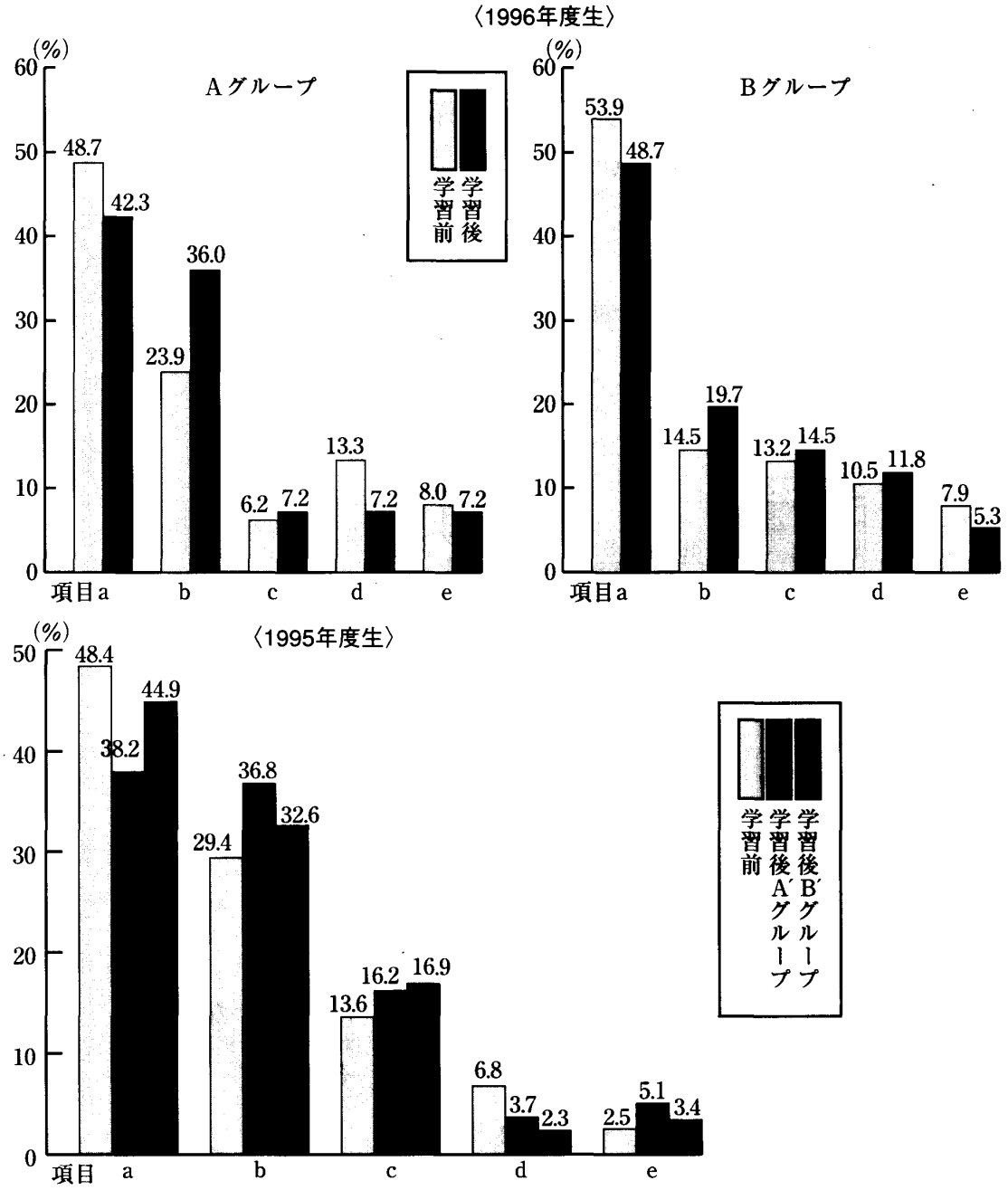
「親が子どもを育てることについてどのように思うか」という問いに対する回答結果を示したのが表11および図２である。項目ａ.親の責任で当然すべきことだと思う　といったやや義務的な捉えをした者が、学習前にはＡ、Ｂグループ共に約50％前後いたが、学習後ではやや減少し、項目ｂ．素晴らしいことだと思う　の割合が増え、次いで僅かな増加であるが項目ｃ．ありがたいことだと思う　といった考えの者が増え、保育を神秘的なこと、また、積極的・前向きに捉えていこうとする意識の変化が見受けられる。こうした変化は、Ａグループに特に見受けられる。また、Ａグループにおいては項目ｄ．わからない　といった、意識として不確かな姿勢の者も学習後には減少している。特に注目したい点は、男子の割合の変化である。Ｂグループではむしろ学習後には倍増して

いるが、Aグループでは約1/3に減少していることである。こうした変化の表れは、先の“子どもを育てることについて”の意識の変化と同じく、1995年度生でも全く同傾向であり、体験学習の成果の表れと考える。日頃幼い子どもたちと接する機会がほとんどなく、身近なこととして捉えられなかったり、無関心でありがちな生徒たちが、直接乳幼児と交流し、幼い子どもたちからも年長者として慕われ、思いやり・いたわりの気持ちが育まれていく中で、保育に関することをより身近なこととして捉えることができてきたものと思われる。

表１１　親が子どもを育てることについて　　実数（%）

項目 ＼ 性別 ＼ 学習段階 ＼ グループ		Aグループ		Bグループ	
		学習前	学習後	学習前	学習後
a．親の責任で当然すべきことだと思う	男	30（46.2）	33（49.3）	22（51.2）	19（43.2）
	女	25（52.1）	14（31.8）	19（57.6）	18（56.3）
	計	55（48.7）	47（42.3）	41（53.9）	37（48.7）
b．素晴しいことだと思う	男	14（21.5）	25（37.3）	6（14.0）	7（15.9）
	女	13（27.1）	15（34.1）	5（15.2）	8（25.0）
	計	27（23.9）	40（36.0）	11（14.5）	15（19.7）
c．ありがたいことだと思う	男	6（ 9.2）	6（ 9.0）	7（16.3）	8（18.2）
	女	1（ 2.1）	2（ 4.5）	3（ 9.1）	3（ 9.4）
	計	7（ 6.2）	8（ 7.2）	10（13.2）	11（14.5）
d．わからない	男	10（15.4）	3（ 4.5）	4（ 9.3）	8（18.2）
	女	5（10.4）	5（11.4）	4（12.1）	1（ 3.1）
	計	15（13.3）	8（ 7.2）	8（10.5）	9（11.8）
e．その他	男	5（ 7.7）	0（ 0）	4（ 9.3）	2（ 4.5）
	女	4（ 8.3）	8（18.2）	2（ 6.1）	2（ 6.3）
	計	9（ 8.0）	8（ 7.2）	6（ 7.9）	4（ 5.3）

図２　親が子どもを育てることについて

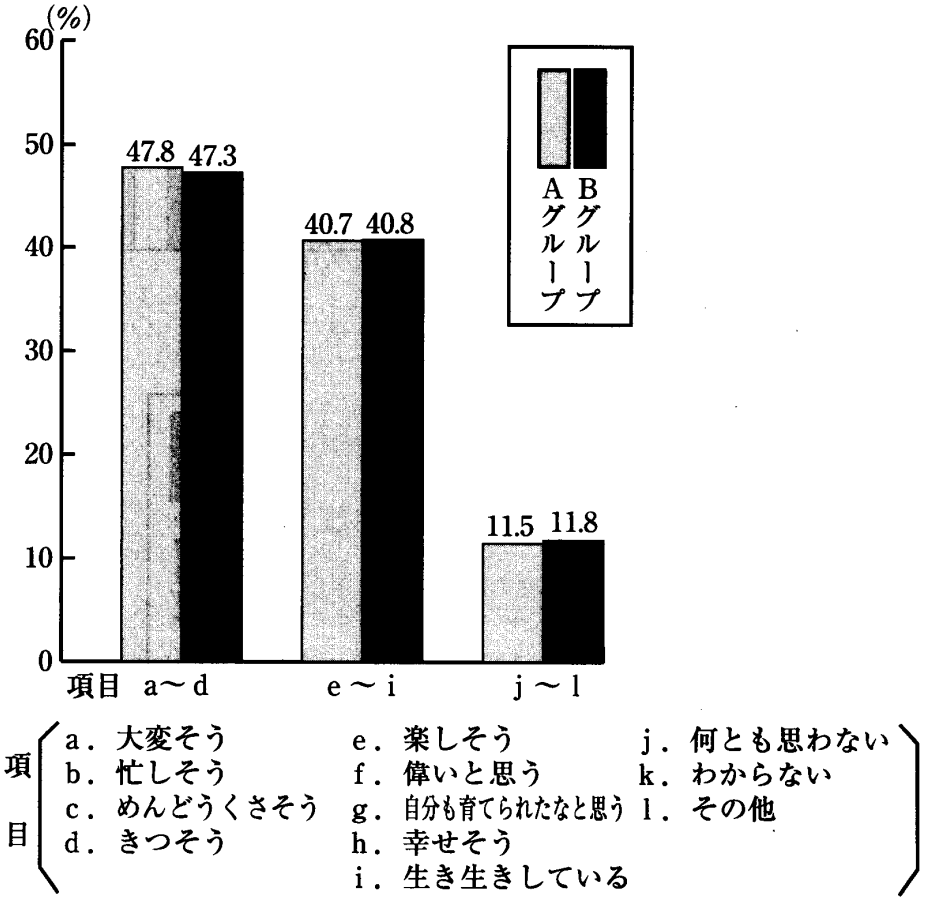


ｃ．乳幼児を育てている親を見ての思い

自分たちと乳幼児との関係だけでなく、乳幼児を育てている親の姿をどう見ているかという点は、将来親としての心構えや生き方に大なり小なりの影響を及ぼすと考える。そこで、「乳幼児を育てている親を見てどのように思いますか」という質問についての回答結果を図３に示す。調査項目を、親として乳幼児を育てることに対して不安を抱かせる要素が大きいもの（ａ．大変そう、ｂ．忙しそう、ｃ．めんどうくさそう、ｄ．きつそう）と、親として乳幼児を育てることに生きがいや喜び・幸せを感じさせるもの（ｅ．楽しそう、ｆ．偉いと思う、ｇ．自分も育てられたなと思う、ｈ．幸せそう、ｉ．生き生きしている）、さらに、無関心や意識決定の不確かなもの（ｊ．何とも思わない、ｋ．わからない、ｌ．その他）に大別して示している。学習前の調査で、保育に関する学習に

対して同じスタートラインにあるため、A、Bグループはほとんど同じ割合であり、不安を抱かせる要素としての項目a～dの割合が、生きがいや喜びを感じさせる項目e～iの割合より高い。このことは保育学習を進めていく上で十分配慮し、乳幼児を保育することについて確かに不安を全く取り除くことは難しいことであるが、それ以上に一つの生命を育てていくことへの生きがいや喜びを抱かせるよう配慮していかねばならない。

図3　乳幼児を育てている親を見て

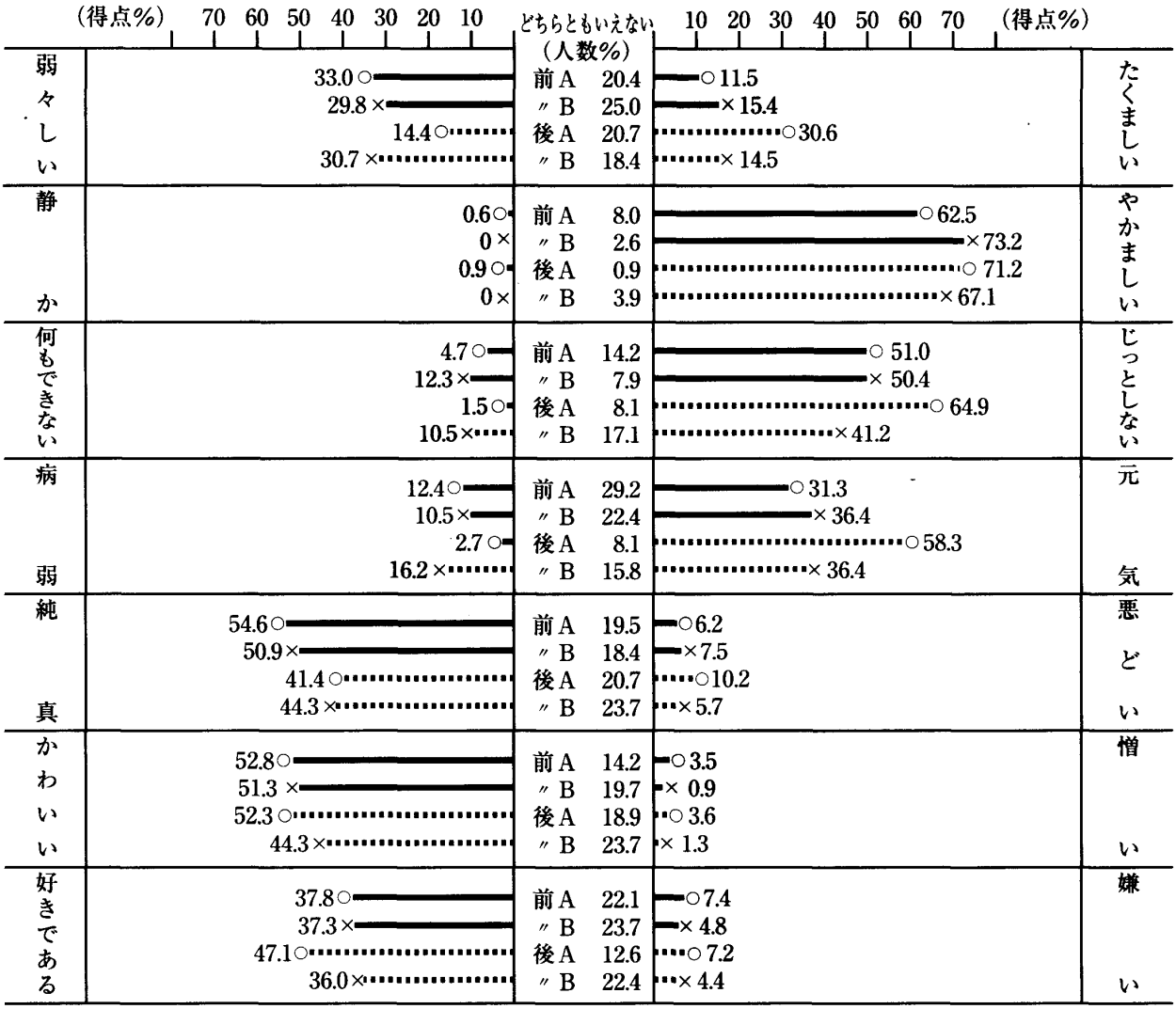


(4) 乳幼児に対するイメージ・思い

乳幼児に対するイメージ・思いはどの程度であるかを学習前と学習後で比較したものが図4である。B（B'）グループの学習のように視聴覚教材を通して間接的に、しかも極一部の乳幼児から抱くイメージ・思いの変化とA（A'）グループのように、直接的にしかも多様な個性を持ち備えた乳幼児との交流を通してのイメージ・思いの変化では、差がいくつかの点で見受けられる。

それは、「弱々しい」、「たくましい」、「やかましい」、「じっとしない」、「病弱」、「元気」、「好きである」といったイメージ・思いの変化である。直接ふれあい体験をしたA（A'）グループは、乳幼児のたくましさやじっとしていなくて元気の良さを肌で感じ取っているのに対し、映像を通しての学習ではそのたくましさは感じとれないで、学習前とのイメージ・思いの変化は小さく、比較的弱々しく、何もできず、病弱であると思っている者は、依然としてその思いを持ち続けているよう

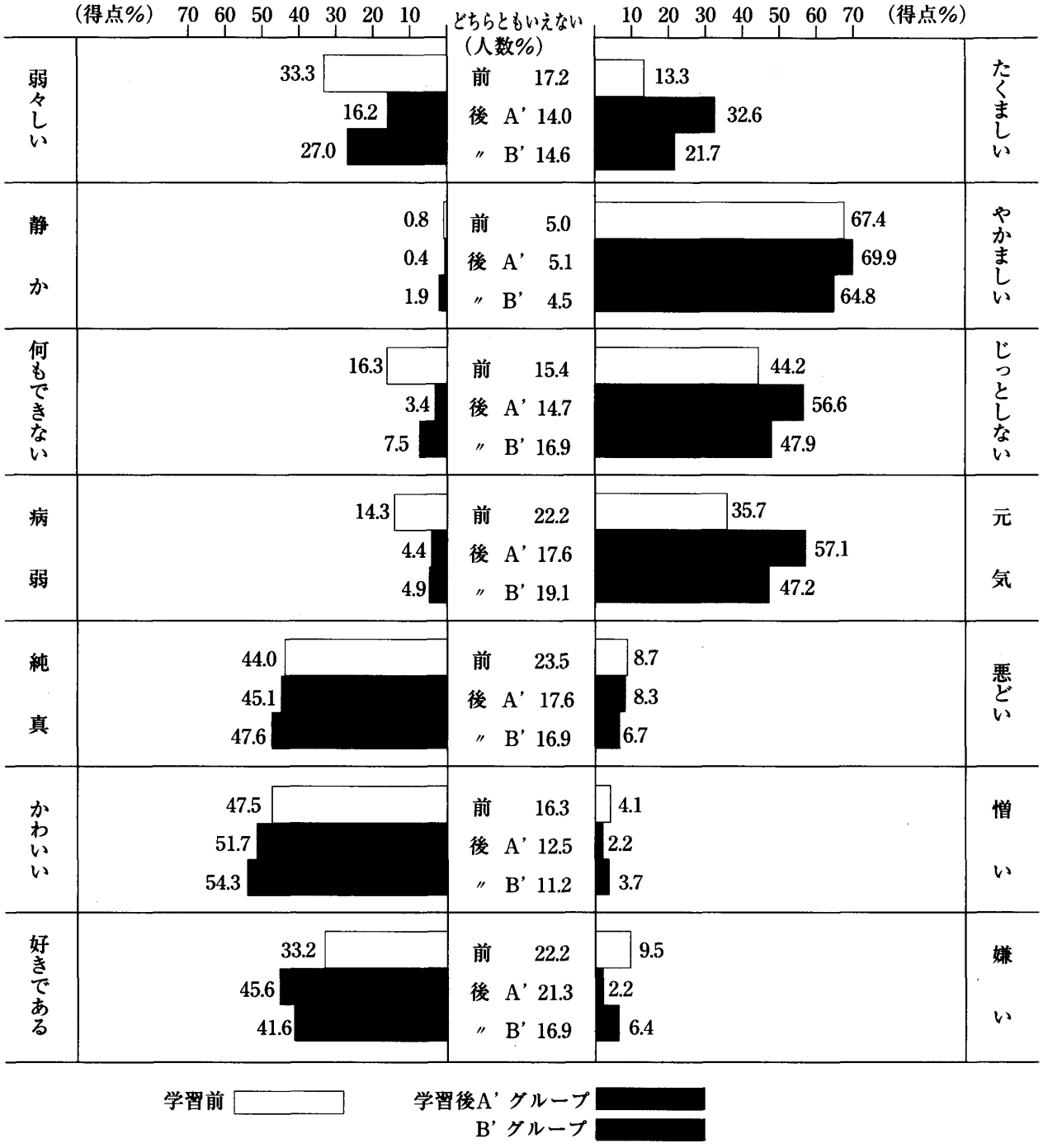
図４－①　乳幼児についてのイメージ（1996年度生）



注：得点%とは、イメージ尺度（非常に〈3点〉、かなり〈2点〉、やや〈1点〉）と人数（度数）の関係で点数化し、非常に〈3点〉を基準に割合で示したものである。

である。また、「かわいい」、「憎い」といったイメージ・思いは、Aグループでは学習前後でほとんど差は見受けられないが、Bグループにおいて「かわいい」という思いが減少し、「憎い」思いが若干増えているのが気になる。さらに、「嫌いである」のイメージ・思いでは、A、Bグループ共に学習前後の差は見受けられないが、「好きである」という思いへの変化は、Aグループに多く見られ、逆にBグループでは、学習前に比べて若干減少している点も気になる。1995年度生では、A'グループに比べてB'グループの増減の割合は小さいが、学習前より「好きである」割合は増え、「嫌いである」割合は減少しているので、1996年度生の生徒集団の特性かもしれない。

図４－②　乳幼児についてのイメージ（1995年度生）



注：得点%とは、イメージ尺度（非常に〈3点〉、かなり〈2点〉、やや〈1点〉）と人数（度数）の関係で点数化し、非常に〈3点〉を基準に割合で示したものである。

5．まとめ及び今後への課題

保育に関する学習過程で乳幼児とのふれあい体験をした生徒と体験できなかった生徒の間には、学習後においていくつかの差が見られた。感受性の強い思春期である高校生が、日常生活ではほとんど乳幼児とふれあう機会や、あるいは周りで乳幼児を育てている親・大人のようすを見る機会のほとんどないまま大人となりまた親となった時、乳幼児と如何に関わればよいのか不安は大きいだろうし、幼い生命に対してのいたわりや大切に思う気持ちの表れは小さいであろう。この時期に、直接乳幼児と交流することは、幼い子どもたちから兄あるいは姉として慕われ、頼られることを肌を持って感じることになり、学習後の調査結果に見られるように、「乳幼児を育てること」への意識が、「めんどうである」「いそがしい」「苦しい」といった重荷としての意識から、「おもしろい」「楽しい」「すばらしい」「幸せである」といった意欲的あるいは前向きな姿勢としての意識への高まりに変化したり、「親が子どもを育てること」についての意識も、「親の責任で当然すべきこと」といった、保育を義務的な捉えとする意識から、「素晴らしいこと」「ありがたいこと」といった神秘的なこととしての意識への変化を促し、体験学習の成果があったことが分かる。また、手作り遊具・玩具を持って行っての交流は、単に手作りすることの意義のみ成らず、自分たちの作ったもので乳幼児が喜んで楽しく遊ぶ姿を目の当たりにすることができ、生徒たちの感動は大きく、意義深いことであった。こうした意識の変化や感動は、いたわりや命を大切にする気持ちを育むことにも繋がっていくし、将来、親としてあるいは大人として子どもたちへの関わりの中で、心温まるコミュニケーションができたり、より望ましい環境を整えていくよう努力する姿勢を培うであろう。保育は両性が共に協力し合ってなされることが大切で、こうした体験学習によって男子の意識に大きく変化があったことも意義深い。

男女共修での保育学習の効果を高めていくのに、乳幼児とのふれあい体験学習は効果的な学習であり、今後も是非継続したい。

本研究にあたり、御指導御助言して下さった広島大学教授の松橋有子教授とアンケート調査の集計を手伝って下さった広島大学教科教育学科家政専攻４年生の吉崎祐子さん、さらに乳幼児との交流に快く応じて下さった桃山保育所の所長及び保母さんたちに深く感謝いたします。

参考資料

1）松橋有子・小林京子・福田公子・柏本和子・井田晴彦・清水凡生・米神博子・湯地由美：研究紀要　第24号　1996年3月　広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制

2）家庭科教育　家庭科における保育の教育　11月臨時増刊　69巻13号　家政教育社